

『ちくま評論選』解説

25 死の再定義 西谷修

- 1 凡例
 ①②：は形式段落番号。◆は、設問。
 ▼は、読解に関する技法。
 2 ▽は、本文の追跡・分析。
 3 ☆は、記述に関する技法。
 4

■前提知識——脳死と植物状態の違い（財団法人岡山県臓器バンクHP）より

世界の殆どの国で「脳死は人の死」とされ、脳死下での心臓、肝臓、肺、腎臓などの移植が日常の医療として確立されています。しかし、日本の臓器移植法では、臓器を提供する意思がある場合に限って「脳死を人の死」としています。人の脳は「大脳、小脳、脳幹（中脳、橋、延髄）」からなっています。このうち、どの部分が障害を受け、機能を失っているかで、全脳死、脳幹死、植物状態に分かれます。

脳死には、大脳と小脳さらに脳幹がすべて障害を受けて機能しなくなった「全脳死」と脳幹が機能を失った「脳幹死」があります。脳幹死の場合は大脳はまだ機能は失っていないが、やがて大脳も機能を失い全脳死に至ります。

植物状態とは、大脳の機能の一部又は全部を失って意識がない状態ですが、脳幹や小脳は機能が残っていて自発呼吸ができることが多く、まれに回復することもあり脳死とは根本的に違うものです。

■見通しと追跡

◆タイトルと「脳死」といったキーワードから、脳死は人の死か、という、いわゆる脳死問題がモチーフになっていると見当がつけられる。「脳死は人の死か」という、この難問に筆者はどう回答するのか、そういう追跡の方向性をもって読んでみることにしよう。脳死問題は、現代的な課題の宝庫である。単純な正解は、だれももっていない。

① ●しばらく前から「死の再定義」ということが論議されている。よく知られているように、これまで呼吸と心臓の停止それに瞳孔の開放によって判定されてきた（死）の臨床的基準を見直し、脳の機能停止をもって人間の（死）と判定しようといういわゆる「脳死」の論議である。いうまでもなくこれは、たんなる臨床的な（死）の定義の科学的厳密化といった問題ではない。医療技術によって臓器の移植が可能になったが、心臓、肝臓といった特定の臓器の移植は、提供者の死を前提としなければ行えない。つまり一人が死ななければ他の一人の延命はできないのだが、それに加えて、提供される臓器はできるだけ「新鮮な」ものでなければならぬ。そのために「新しい」と言うか、死にきっていない「死体」が必要となる。「脳死」の論議はその要請に応えるために生じてきた。つまり従来の基準で死んだとみなされた段階では、臓器を生きたものとして活用するには遅すぎるのだ。だから「脳死」をもって「人間の死」と認定する必要がでてくる。医療が規範的にそれを（死）と認定すれば、以後その身体は「死体」である。すでに死んだ人体から臓器をとってもその行為は殺人にはならないし、他の人間を死から救うために、しかるべき「権利者」の同意のもとに行われるならば、臓器摘出は死体棄損にはならず、人道と公共の福利にかなう適法な行為となる。「脳死」をもって人間の死とするという「死の再定義」の試みは、◆1このように要請のもとに生まれてきた。

▽「脳死」と「臓器移植」の問題のおさらい。従来の死は、①呼吸が停止、②心臓が停止、③脳機能が停止、ということと判断されていた。しかし、脳死では、人工呼吸器によって、①脳機能が停止、しかし、②呼吸継続、③心臓機能継続、という状態になる。身体は呼吸し、体温を保っている。

◆問1「このような要請」とはどのようなことか。
 ▼指示内容は、原則直前。「脳死」をもって人間の死とするという「死の再定義」の試みは、（こうなつてほしいという考え）のもとに生まれた。どうなつてほしいというのか？ こう考えてみれば見えやすいだろう。そうなつてほしい状態は、直前の一文に示されている。

「すでに死んだ人体から臓器をとつてもその行為は殺人にはならないし、他の人間を死から救うために、しかるべき「権利者」の同意のもとに行われるならば、臓器摘出は死体棄損にはならず、人道と公共の福利にかなう適法な行為となる。」

- ・ 人体から臓器をとつてもその行為は（殺人）にはならない。
- ・ 他の人間を死から救うための臓器摘出は（死体棄損）にはならない。
- ・ 人道と公共の福利にかなう適法な行為となる。

逆に言うと、従来の死の定義のままだと、臓器摘出は（殺人）（死体棄損）の罪に問われ、違法かつ非人道的な行為と見なされる恐れがあるということだ。

「解答例」「臓器摘出及び移植を適法かつ人道的な行為として行いたい」という要請。」
 ※②にある「移植用臓器の確保」という語を使ってもいい。

② ●そしてまた移植用臓器の確保とは別に、「生きている死体」あるいは「死んだ生体」が、じつさに少なからず生み出されるようになってきているという事情もある。テクノロジーによる生活条件の変化が事故の機会を増大させ、その一方で生命維持の技術が進歩して、生きている「死体」という新しい「生存形態」が生み出されている。たしかに人間の人間としての生、いかえれば人格的生存が脳によって統括されているとみなせば、脳の死はその意味では人格的死だということになり、脳の機能停止は人間の死とみなしうることになる。こういう考え方のベースには西欧の伝統的な霊肉二元論の反映があるということがよく指摘される。だが伝統的な二元論は基本的には「霊」あるいは「精神」の側に力点を置いた二元論、つまり観念論的だった。人間の生命は本質的には精神に宿り、肉体は死ねば腐敗に委ねられる飯象でしかない。そして肉體の死はむしろ精神を解放するときとさえ考えられる。だが「脳死」による肉體の人格からの分離は、むしろ逆に肉體の方を（死）から救い出すためになされる。肉體から早く精神を厄介払いして、人格に拘束されない資材を手に入れるために、精神の死を人間の死として約定しようというのだ。精神と呼ばれる現象が脳の一機能なのか、人格は脳の働きに還元されるのかどうかはここでは深く問わずにおくとして、ともかく「脳死」を「人間学的な死」と認定し、「人間」であることの制約から肉體を解放

しようとするこの目論見に、伝統的な二元論の影をみるとすれば、それは霊肉二元論の◆2意図的に反転されたカリカチュアでしかありえない。

▽「死の再定義」という試みが生まれた要因の二つめは、「生きている死体」の増加。人間の死⇨人格的死（⇨脳死）、という考え方は、肉体と精神を分け、人間の本質⇨精神、とする西欧思想から来ている。しかし、精神⇨肉体という西欧思想に対し、脳死論では、肉体⇨精神というふうに、価値が逆転している。

言い換えれば、伝統的な心身（霊肉）二元論は、〈観念（精神）論〉であるのに対し、近代医療は、まったく逆に、〈唯物（物質）論〉である、というわけだ。カリカチュア⇨風刺画、戯画。

◆問2「意図的に反転された」とは、具体的にどのようなことか。

☆解答の型を作る。「〽する意図で、〽を〽に逆転させたということ。」

「解答例」「人格と切り離された肉体を手に入れるために、肉体より精神に価値を置く霊肉二元論を、精神より肉体に価値を置く二元論に逆転させたということ。」※〽が、〽に反転された、という構文でもいい。

③ ●まさに身体を物質レヴェルで機能的に扱う近代医療、その最たるものである外科的医療がここで不意に観念論に鞍替えするはずもなく、臓器移植もまったく物質的な発想からする人体部品のリサイクルなのだ。それは他の機械類の部品交換と原理的に変わらない。もちろん、人体を利用可能な「部品」の集合とみなすことが心情的な抵抗に出会うとしても、そのこと自体は別段咎められるべきことでもない。だが、この部品は本体が完全に死んでしまっただけでは利用できず、そのために人為的に「死」の認定を早めなければならぬ。そこでとつづく昔にお蔵入りにしていた観念論的「二元論」をかつぎ出し、それを転倒してあげてはめて、人間は精神であり従って脳が死ねば人間は死ぬと機械論に接ぎ木する。そこにこの「読1」「死の再定義」のいかかわしがある。

▽臓器移植推進派のロジックのまとめ。書き手の判断は、「（臓器移植推進派の）死の再定義はいかがわしい」というもの。なぜか。

臓器移植推進派の本音は、人体各部を部品として使いたい、というところにある。部品として使うためには、完全に死ぬ前に確保しなくてはならない。どうすれば、死の認定を早めることができるか。そうだ、人間とは精神だという考え方があった。それを利用しよう。人間とは精神なのです。だから、脳が死に、精神活動が停止すれば、それはもう人間ではないのです。だから、その肉体から部品を取り出して何れも問題はないのです。こういうことにしよう。死を新たに定義し直すのだ！

この定義の何がいがわしいか。本音では、人間を物質・部品としか考えていないのに、建前では、人間は精神だといっている点である。

（余談）のような本音と建て前がねじれた論理は、他にも例えば、経済や政策の視点に立つ言説などにも見られる。本音では人間を働かせる道具としか考えていないのに、人間とは主体性・自立性をもつものだ、と唱えるのもそうだ。自己責任で生きていってもらうほうが、財政的に助かるし、企業活動の負担も減る。人間にお金をかけたくないというのが本音であり、人間より機械のほうが安くて効率が高ければ、よるこんでそちらに乗り換えようと底意が見えるときがある。能力開発だ

とか主體的な生き方などという称揚の背後にあるものに気づくべし。

④ ●もちろんこのことはたとえ、心臓に難病をもつ子供や若者に、もはや助かる見込みのない人の心臓を移植する、といっただれもがとりあえずその功徳を承認するケースによって、「人道（人間）主義的」正当性を与えられる。そしてこの「人道的功徳」のために「脳死」は社会的に承認されなければならない、と主張される。だが、「脳死」の約定を急ぐべきだと主張する人々が、その「効能」をさらに一般化して、脳の機能停止を人間の「死」として承認することの「人類福利に対するはかり知れない効能」を説きだすとき、なにが「脳死」認定への要請を促しているのか、それを一般的に承認することがどういう意味をもつかが、見まごうかたなく◆3あらわになる。彼らによれば、脳死による死亡認定の帰結は医療の実践に大きな可能性をもたらす。「脳死」は、必要な人のために臓器の採取を可能にするだけでなく、一般的な臓器の提供者を作り出し、さらに「脳死体」は臓器の「理想的な貯蔵庫」となって臓器移植の可能性そのものを広げ、かつ人工製造のむずかしい「血液やホルモンの（生きた！）工場」となり、あるいはまた解剖や手術実習のためのまたとない「医学教材」として活用しようという。ということは「脳死」の一般的意義とは、「人格」の消滅を認定することによって人体の資材としての活用に道を開くということである。

▽（だが）以降の▼問答を確認。問「脳死を一般的に承認することがどういう意味をもつのか」↓答「人体の資材としての活用に道を開く、という意味」。

具体的に書かれている四点も重要なことだ。知識としてインプットしておいてほしい。「臓器移植」を超えて、脳死認定のもたらすものとは？

- 1 一般的な臓器の提供者を供給。
- 2 臓器の「理想的な貯蔵庫」。
- 3 人工製造のむずかしい「血液やホルモンの生きた工場」。
- 4 解剖や手術実習のための「医学教材」。

◆問3 どのような「意味」が「あらわになる」のか。

▼定義文（とは）に注目すればいい。「脳死」の一般的意義とは「以下を抜き出して整える。

「解答例」「脳死による人格の消滅を認定することによって、人体を資材として活用することに道を開くという意味」。

⑤ ●「脳死」はそう認定された人体の「人格性」を解除する。「脳死体」はしたがってもはやだれでもなく、人格をもたない以上「人間」ではない。そしてこのだれでもない無名の身体を「公共の資材」として活用することが、「脳死」の公認のもたらす最大の効用なのだ。それが臓器移植という限定された問題よりはるかに広範で重要な「効用」だと謳われている。しかし「死」と認定するとしても、やはりこの身体は明らかに生きています。そういう言い方が、古い生命観にとらわれた不穏当な言い方だというなら、依然として一定の代謝活動を維持していると言ってもよい。しかしともかく、脳による統括は停止しても統括なしの生命機能が維持されているのでなければ、「脳死体」がここにあげた「効能」を發揮しえないのは明らかである。だからここで

当然、統括なしの拡散した生命というものはないのか、束がほつれて拡散した生存、いわばそれ自体としての身体の生存ないし生存する身体とは利用しうる資材にすぎないのか、という問いが問われざるをえない。

▽▼新たな問い。人体Ⅱ資材、という考えを批判した後、筆者が立てた問いは、「統括なしの拡散した生命というものはないのか」というものだ。まだ動いている個々の臓器は、生命ではないのか、ということだ。

⑥ ●「脳死」を人間の死と認めることと、「臓器移植」がある程度可能だということ、あるいは「人格喪失」状態での身体の生命維持が相当程度可能だということとは、違う問題である。前者はすでに述べたように、人間の精神や身体や死に関する思考の問題であり、後者は複合的な医療技術のある到達段階を示すものである。つまりこちらは人間の存在の条件のひとつであり、好むと好まざるとにかかわらず◆4それに人間の思考は対処しなければならぬのだ。「脳死」の思考もそれへの対応の一つである。だがこの思考は〔読2〕テクノロジーの進化が人間の存在条件を根本的に変えてしまったにもかかわらず、古い人間観を無造作に再利用して、結果的にこの変容の意味を覆い隠している。

▽▼指示内容の確認。少し入り組んでいるので、慎重に。前者／後者、「こちら」「それ」の内容を置き換えておく。

「脳死」を人間の死と認めることは、人間の精神や身体や死に関する思考の問題である。「臓器移植」がある程度可能だということは、複合的な医療技術のある到達段階を示す。医療技術の到達段階は人間の存在の条件のひとつであり、好むと好まざるとにかかわらず医療技術の到達段階に人間の思考は対処しなければならぬ。

現実が変わっていく。私たちはそれに対して考えていかななくてはならない。しかし、脳死の思考は、現実の意味をきちんと考えていない。筆者はそう考えている。

◆問4「それ」とは何をさすか。

〔解答例〕「複合的な医療技術の到達段階。」

⑦ ●医療は人間から病を、ひいては死を遠ざける努力をしてきた。かつてなら「人間から死を遠ざける」と言うとき、それがそのつどひとりの人間の生死の問題だというのは自明のことだった。だがいまや、ひとつの生命を延長するためにある別の「死」が活用される。そこで果たされるひとりの人間の延命は、他の人間との部分的な複合化によって実現され、延命は少なくとも身体的レヴェルでの〈個〉としての◆5同一性を代償にして果たされる。そこにはすでに〈個〉それ自身の身体レヴェルでの〈共同性〉というものがかいま見える。

▽この命が他の命（死）によって生かされる。身体レベルでの共同性とは、そういうことだ。人間の存在条件の変化として、筆者が捉えているのはこの点である。

◆問5「同一性を代償にして果たされる」とはどのようなことか。

キーワード「同一性」は知識として知っているはずだというのが前提となっている。☆傍線部延長して、「延命は少なくとも身体的レヴェルでの〈個〉としての同一性を代償にして果たされる」を言い換える。「延命は、くを失うことによって、実現する

ということ。」「同一性のいいかえが腕の見せ所である。具体化したい。本文にある語を利用していい。⑧にある「固有」「交換不可能（分解可能）」という語は使える。〔解答例〕「延命は、身体の一部を他者と共有することで自分の身体の固有の感覚を失うことによって、実現すること。」

⑧ ●死は個体の存在を終了させ、個体を完結して、ある固有の存在を固有の存在たらしめるものだった。その死の繰り延べは個体の完結を先送りにするが、現在のテクノロジーが実現しつつある死の繰り延べ、そしてそこに望みされる〈不死〉は、たんに個体の死を繰り延べるだけではなく、個体の同一性の在り方をも変えると言わねばならない。それはたんに自分に固有のものでない臓器によって生き延びる側だけのことでなく、臓器をいわばリサイクル用の部品として提供する側においてもそうである。臓器移植が可能だということは、身体そのものが分解可能であり、その部分部分があるレヴェルでは固有性を失って交換可能だということの了解が前提になっている。もちろん器官という概念の普遍性が、すでにそのことを含意していないわけではない。だが、たとえば肝臓はどれでも肝臓であるというその含意は、技術の進化によってはじめて現実的に「交換可能性」となったのだ。そこで、この交換の対象となる部分的な身体を人格性と固有性から解放するために、脳だけに人間の固有性を形成し人格的同一性を支配する役割をふりあてるといっても出てくる。だが、身体の各部分が脳による統合を受けなくなるとたんなる非個性的な交換部品となるのではなく、ほつれた束のようになってそれぞれの生命をもつているとすれば、中枢としての脳によって非個性的な各部分が統合されるというのではなく、むしろそれぞれに生きた個性的な部分の複合が脳の統合を可能にしているともできる。それに、臓器移植は心臓や肝臓と同じ資格で、技術的に可能さえあれば脳それ自体の移植にも進みうるのであり、移植のベースにあるテクノロジーは脳とその他の器官とを◆6本質的に区別してはいないのである。

▽整頓してみよう。身体の分解・交換可能性が現実の問題となったのは、技術が進化したためである。さて、それに対して、人間の問題としてどのように〈思考〉するか。答えの一つは、「脳だけに人間の固有性を見る」という脳死論の考え。もう一つが、筆者のいう「それぞれに生きた個性的な（身体の各）部分の複合が脳の統合を可能にしている」という考え。

◆問6「本質的に区別してはいない」のはなぜか。

これは、本当は本文に直接説明されていることからではない。恐らくそうであろう、という推論であるが、その推論の根拠は、人体Ⅱモノ、という発想をしているところにある。それをふまえて書く。抜き出し型では書けない。

〔解答例〕「人体全般を活用可能な資材と考えているのなら、脳もまた例外ではないと推定できるから。」

⑨ ●臓器移植というプラクシス実践が身体の徹頭徹尾生理的・機能的把握の上に成り立っているものだとすれば、むしろこの交換可能性と〈個〉の複合化をそのまま物質的マテリアルなレヴェルで受けとめるべきだろう。つまり人間は「精神」によって人間

なのではなく、この「身体性」において人間なのであり、「私」がこの人格性であるのは脳による統合によってではなく、この身体の複合性においてであり、「私」の人格的同一性とは、脳の同一性によって単一不変の本質として保証されるのではなく、この身体の複合性によって可変のものとしていつでも組織し直されるのだ、と。そして「読3」「私」とは誰でもなく、その誰でもないことにおいてはじめてこの「私」の生があるのだ、と。そうでなければ、「人格的死」を被って希薄に生存する消耗品となり、なお最終的な抹消を受けて消えてゆくまで生き続け、あるいは生き延びた人々の「非人格的生存」の体験は救われまいだろう。

▽▼主張の部分だが、少しむずかしく感じるかもしれない。整理すると、①人間⇨精神という考えを否定。②なぜなら、そのことによって身体⇨モノ（非人格）となるから。③人間（人格）⇨身体だ。④「私」の身体は、人格性を保ったまま他の身体と結合しなおして、新たな人格性を生んでいく。

■読解問題1 「死の再定義」のいかかわし」とあるが、どのような点がいかがわしいのか、説明しなさい。目安八〇字。

いかかわしい⇨疑わしい、信用できない。「いかかわし」は、どこに生まれるのだろうか。☆傍線部を延長する。「そこにこの「死の再定義」のいかかわしがある。」「そこ」とは？ ▼指示内容は原則直前。

「この部品は本体が完全に死んでしまつてからでは利用できず、そのために人為的に「死」の認定を早めなければならぬ。そこでとつきの昔にお蔵入りにしていた観念論的二元論をかき出し、それを転倒してあてはめて、人間は精神であり従つて脳が死ねば人間は死ぬと機械論に接ぎ木する。」

人体を部品として利用したいが、本体が完全に死んでしまつてからでは利用できないので、人為的に「死」の認定を早めたい、というのが、死の再定義を試みる立場の本音である。そのために、心身二元論を持ち出して、人間は精神だ、身体は人間ではない、という論理を適用し、脳の死、すなわち精神の死こそ人間の死だ、と主張する。この本音と建て前の矛盾が明らかになるように記述する。

「解答例」「心の底では、人間の身体を部品として利用したいと考えながら、その目的を実現するために、口では、人間とは精神だから、精神の死である脳死は人間の死だと主張する点。」

■読解問題2 「テクノロジーの進化が人間の存在条件を根本的に変えてしまった」とはどのようなことか、説明しなさい。目安七〇字。

「人間の存在条件」とは何だろうか。そのままではわかりにくい。「存在」「テクノロジー」というキーワードをヒントにすると⑧に次のような記述が見つかる。

「A死は個体の存在を終了させ、個体を完結して、Bある固有の存在を固有の存在にたらしめるものだった。その死の繰り延べは個体の完結を先送りにするが、現在のテクノロジーが実現しつつある死の繰り延べ、そしてそこに望見される〈不死〉は、たんに1個体の死を繰り延べるだけでなく、2個体の同一性の在り方をも変えると言わねばならない。」

テクノロジーによる変化とは、傍線部1・2の二箇所であることがわかる。それに対応する従来のあり方が、二重傍線A・Bである。

A 死：個体の存在の終了と完結 ↓ 1 脳死：個体の死は完結せず繰り延べ

B 個体：固有の存在 ↓ 2 個体：固有性を失う

解答は、医療技術の進歩が、〈A・B ↓ 1・2〉のような変化をもたらした、というところを書けばいい。

「解答例」「これまでは死が個体の存在を終了、完結させていたが、医療技術の進歩が、個体の死を完結させず、その固有性を失わせるようになった、ということ。」

■読解問題3 「私」とは誰でもなく、その誰でもないことにおいてはじめてこの「私」の生がある」とはどのようなことか、説明しなさい。目安八〇字。

明らかに直前の部分と対応している。直前を整頓しよう。「くではなく」の部分と「くだ」の部分を組み直すと、

「人間は「精神」によって人間なのではない」

「私」がこの人格性であるのは脳による統合によってではない」

「私」の人格的同一性とは、脳の同一性によって単一不変の本質として保証されるのではない」

「人間はこの「身体性」において人間なのである」

「私」がこの人格性であるのはこの身体の複合性においてである」

「私」の人格的同一性とは、この身体複合性によって可変のものとしていつでも組織し直される」

こう見てくると、一番最後のセットが、全体をふまえたものとなっていることがわかる。「私」とは誰でもない」というのは、「私」の人格的同一性が、脳の同一性によって保証されるのではない」ということと対応している。「その誰でもないことにおいてはじめてこの「私」の生がある」というのは「私」の人格的同一性とは、この身体複合性によって可変のものとしていつでも組織し直される」に対応している。

表現が硬いので、かみ砕きたい。ここで▼実感として理解できているかが問われる。文中の語をそのまま使つてとりあえず書くと、

「私」という人間の人格的同一性を、脳の同一性によって保証するのではなく、身体複合性によって組織し直せるものとしてとらえること。」

前半はともかく、後半に具体性をもたせたい。具体的には臓器移植の問題であることを思いだそう。「私」のいくつもの臓器は、だれかのものを使つたり、だれかに使つてもらつたりする交換可能なものになりつつある。他者と交換可能な部分が複合した身体。それが「私」だということである。

「解答例」「私」という人間の人格的同一性を、脳の同一性によって保証するのではなく、他者と交換可能な部分が複合し、再編成可能な身体的な存在としてとらえること。」

■論述への挑戦

問。筆者は移植推進派の脳死の考え方に批判的であった。それをふまえて、自分はどう考えるか、論ぜよ。八百字以内。※「臓器移植法」をネットで検索してみよう。